

硫黄島輸送作戦と父島

—第四八〇四船団の聳島沖砲撃戦をめぐって—

上 條 明 弘 (父島在住)

要 約

太平洋戦争中の父島は南方戦線への物資輸送の中継点であった。1944（昭和44）年6月にアメリカ軍のサイパン攻略が始まると、硫黄島の防衛力増強が必要となった。そこで、日本軍は父島を経由して物資を硫黄島に届けるべく、船団を組織した。しかし、多くの艦船が潜水艦、艦載機により攻撃を受け、沈没・損傷した。1944年8月4日、駆逐艦「松」を旗艦とする第四八〇四船団は、アメリカ海軍任務58機動部隊の艦載機の攻撃、および任務58.1.6機動部隊の巡洋艦・駆逐艦の砲撃をうけた。この攻撃はレーダーと連携した砲撃の実験であることが示唆された。

I. はじめに

上條（2010）では、太平洋戦争における洲崎飛行場の果たした役割について見てきた。調査を進めるうち、サイパンや硫黄島への輸送船団に多くの犠牲があり、今もその一部の船が父島付近の海岸や海中に没していることを知った。「硫黄島攻防戦」は映画にも描かれ、太平洋戦争中最大の激戦の一つである。父島や硫黄島付近の海域でも、陸上戦に匹敵する過酷な戦闘が行われたことを本稿では明らかにする。

II. 米軍のサイパン侵攻から硫黄島増強へ

1944年6月15日、米輸送船団はサイパン西方に至り、次いで上陸を開始した。サイパン失陥は日本の大本営及び政府が設けた「絶対国防圏」の破綻を意味するものであった。聯合艦隊は同日「あ号作戦決戦発動」を下命し、硫黄島、東・西カロリン諸島の基地航空勢力と機動部隊（空母を中心とした艦隊）を進出させ、敵機動部隊の撃滅を企図した（防衛研修所戦史室、1968）。そこで大本営は鹿児島で待機中の陸軍兵力を海軍第五艦隊でサイパンに運び（イ号作戦）、その後、聯合艦隊支援の元、二個師団をもって7月上旬にサイパンの米軍を撃破する作戦（ワ号作戦）を計画した。しかし、マリアナ沖海戦の敗北による航空兵力の壊滅と空母の喪失、サイパン島の戦況悪化に伴い、作戦は実質困難となり、サ

イパンに送られる兵力は硫黄島に送られることになった（伊号作戦、これについてはIV章で述べる）。また、6月26日には大陸命千三十八号を發し、硫黄島兵団の戦闘序列を令した。ここに栗林忠道中将を兵団長とする小笠原兵団が組織されたのである。今後陸軍と海軍は協力して、父島を経由して硫黄島へ兵士や物資を輸送した。では、米軍のサイパン侵攻作戦直前の日本軍の輸送作戦はどのようであったか、護衛艦艇の記録から見てみよう。

Ⅲ. 四五三〇船団によるサイパンへの輸送作戦

父島二見湾の製氷海岸沖200mの水深20mの海底に駆潜艇50号が沈んでいる。駆潜艇50号の艇長の川副克己（予備中尉、後大尉）の記録（川副、1990）をもとに、対潜掃討の方法と実戦、サイパンへの船団護衛の模様を見てみよう。

まず、駆潜艇の主な目的である対潜掃討の方法について、次のように述べている。

「我が駆潜艇は排水量500トン足らずの小艦艇であるが、敵潜水艦は2000～3000トンであり、駆潜艇は最高速力16ノットで潜水艦は水上速力20ノット、水中速力10ノットと聞かされていたので、浮上潜水艦を駆潜艇で追いかけてみてもとうてい追いつけるものではない。又潜水艦の砲は12センチで駆潜艇の砲は8センチであるから、砲戦しても勝ち目はない。（中略）

日本が敗戦に傾いたころには敵潜は潜ったまま探信儀により相手船の動静を確かめ、その方位、距離を測定してその運行模様を把握し魚雷を發射、ただの一発で的確に目標に命中させることが出来るほど計器の性能も操作の技術も優れていた。（中略）

潜水艦（米）は探信儀の性能も駆潜艇よりはるかに優秀で、測定可能距離も駆潜艇より長大であったものと思われる。

駆潜艇の探信儀の測定可能距離は2000m足らずで、せいぜい1500～1400m位であったと私は考えていた。これがせめて4000～3500ぐらい測定可能であったなら、補足した敵潜を取り逃がすことなく撃沈することが出来るのにと常に残念に思っていた次第である。

爆雷によって潜水艦に致命傷を与えるには爆雷が少なくとも25m以内の距離で爆発しなければならないとされていた。当時、（日本海軍の）爆雷の最高調停深度は60mであったから、潜水艦が100m近く潜航すれば、ほとんど打撃を与えることが出来ないわけである。（後略）」

潜水艦を探知する機械には二種類あり、水中聴音機（潜水艦の出すスクリュウ音などを聞いて方向・距離を測定する装置、パッシブ・ソナー）と水中探信儀（音波を出し、潜水艦に当たって跳ね返ってくる音を観測し方向・距離を測定する装置、アクティブ・ソナー）である。探知後、潜水艦の上に爆雷（海中に落とし、潜水艦がいるであろう深度で爆発さ

せる)を落とし、潜水艦に損傷を与えるのである。

川副は、爆雷の3種類の散布法について詳細に述べている。第一は投射機により左右(約50mずつ)に爆雷を投射する方法で、一回の攻撃は26秒で幅100m、奥行き230mの範囲に8個の爆雷を散布することが出来る。第二は投下(艇後部の軌条：レールを転がして艇後方に爆雷を落下させる方法)と投射を交互に行う方法で、一回の攻撃は26秒で幅220m、奥行き230mの範囲に爆雷7個を散布することが出来る。第三は投下のタイミングを艇長の胸算用で決める方法である。

川副は日本郵船で働いてきたが、1941年に海軍に召集され、父島、マーシャル諸島、クェゼリン島、ウェーキ島を転戦したのち、1943年10月、広島県因島の日立造船で第五〇号駆潜艇の艤装(艇の設備を整えること)に従事して、同11月同艇の艇長に就任した。彼は細かく日記をつけており、五〇号がどのような作戦行動をとったか詳細に記録されている。1944年前半はサイパンと内地を運行する艦隊護衛を行っている。

2月、父島付近で9日間にわたり対潜掃討。

3月、父島よりサイパンまで船団護衛(5日間)その後テナンへ行き、内地まで護衛(9日間)

4月、木更津よりサイパン・グアムに船団護衛(21日間)途中5回の対潜戦闘。その後、父島から横須賀まで船団護衛(5日)途中婦婦岩付近で1回対潜掃討。

5月、工廠にて改造工事。25耗単装機銃2機を設置、探信儀を5型(最新式の三式5型のことだろう)に換装、対空電探(レーダー)を装備。完成後、船団護衛(4日)。途中青ヶ島付近で対潜戦闘2回。

5月29日より三五三〇船団の護衛に加わり、この時に本格的な対潜戦闘が行われたので詳しく述べる。この船団はサイパンへの増強作戦で、輸送船勝川丸、高岡丸、玉姫丸に陸兵約1万人を便乗させ、兵器・弾薬・食料などを4隻の商船に搭載した。護衛艦は水雷艇「鴻」、一七号、三三号、五〇号駆潜艇、第一輸送艦、杵崎、駆潜特務艇昭南丸であった。しかし途中、勝川丸、高岡丸、玉姫丸は潜水艦の魚雷により相次いで沈められ、鹿島山丸、ファブル丸も雷撃により沈没。6月9日サイパンに到着したが、一万余人の陸兵のうち、救助されたのは三分の一に過ぎなかったという(川副の長男、川副克哉の証言では、駆潜五〇号は生存者を捜したのだが、見つからなかったと川副が述べていたという。2011.1.16.聞き取り)(注：防衛研修所戦史室(1968)によるとこの輸送作戦は「第四十三師団第二次輸送」とされ、船団名は「四五三〇船団」であった。輸送船団は「神鹿丸：2841トン」「たまひめ丸：3080トン」「鹿島山丸：2750トン」「香取丸：1922トン」「杉山丸：4379ト

ン」「杵崎」「輪一号（注：一等輸送艦一号、伊達（1974）によると作戦参加後6月12日艦上機の攻撃を受け航行不能となり、パラオに曳航され、そこで海上砲台として戦ったが、艦上機の攻撃を受け7月27日沈没）」「勝川丸：6851トン」（師団直属部隊、独立臼砲第十四、第十七部隊などが乗船）「高岡丸：7006トン」（歩兵第百十八聯隊司令部及び第一、二大隊、砲兵大隊主力、第二十三野戦飛行場設定隊ほか）「はあぶる丸：5467トン」（第三大隊、独立臼砲第十七大隊の半数、第九独立整備隊ほか）であった。船団は5月30日館山からサイパンに向かったが、次のように逐次被害を受け6月7日サイパンに入港した。

6月4日 勝川丸米潜水艦の攻撃を受け沈没。

6月5日 高岡丸、たまひめ丸パガンの西300海里において米潜水艦の攻撃を受け沈没。

6月6日 10:10サイパンの北西200海里にて潜水艦により鹿島山丸沈没、はあぶる丸大火災。

このように陸軍部隊の乗船は全部遭難し、特に歩兵第百十八聯隊は聯隊長以下その主力を失い、救助された約千名も大部は火傷など重患で戦力は極度に低下したしまったという。

6月12日、駆潜艇五〇号は四六一一船団を護衛してサイパンより父島に向かった。護衛艦艇は旗艦水雷艇「鴻」、三三号・五〇号・五一号駆潜艇、五一号駆潜特務艇、六号・二二号掃海艇など9隻であったが、防御能力を持っていたのは、水雷艇と駆潜艇のみであった。輸送船は門司丸、天龍丸など12隻であった。ところが、11日に敵艦載機が襲来し、「鴻」が撃沈され、五〇号でも機銃員1名が戦死、1名が重傷を負った。敵機は主に輸送船に爆弾を降らせ、五〇号には一発も投下されなかったが、銃撃を何回も受けた。グラマンを二機撃墜したが、二時間の対空戦闘で戦死者2名、重傷者数名がでた。川副自身も頭に軽傷を負い、頭部が血まみれになった。敵機が去った後、川副は肩や上腕に破片を受けていることがわかり、治療をした後、艦橋にあがってきた。14:30、第二波の50機余りが襲来し、天龍丸ともう一隻の輸送船が爆撃を受けて炎上した。16:20、川副は両足に被弾し立ってられなくなり、横たわりながら艇長として指揮を続けた。ようやく日が暮れ、敵機は去っていった（川副克哉の証言では機銃が爆雷に当たると大爆発を起こして危険なので、爆雷を海に捨てたと川副は述べていたという。命中コースの爆弾は丸く見えるので、船の舵を切りながら爆弾を避けた。駆潜艇は小型で小回りが効いたので、爆弾を避けることができたのだらうと述べている）。「弾薬庫の隣室が火災」「水深個所あり」との報告があがってくると「訓練通りに防止せよ」と指示した。

翌13日、孤立した五〇号は船団を搜索したが、見つからず、他の艦船はすべて（20隻）

沈没したものと考えられた。五〇号も火災や浸水の手当に成功したものの、重油が漏れだしていたので、父島に向かって急行することにした。

14日、敵機による被害は戦死10名、重傷6名、軽傷28名（注：13号型駆潜艇の乗員は68名なので、半数以上の人員が被害を受けたことになる）、戦隊弾痕385、無線電話・探信儀・電測兵器・探照灯損傷、倉庫火災、重油タンクの油流出、探信儀室浸水であった。川副は艦橋に横になりながら指揮を続けた。

15日、川副は兵に抱えなら六分儀で船の位置を測定し、進路が西によっていることを確認した。このままだと父島入港は夜間になるため、夜明けを待って入港することとした（注：15日に父島は米機動部隊艦載機による初めての空襲を受けた。五〇号は遅れて入港したので、攻撃を受けずにすんだ）。

16日、二見港入り口は防潜網と機雷が敷設されていたので、川副は両脇を兵に抱えられながら操船した。09:00、上陸場近くに投錨し、軽傷者は徒歩で、重傷者は担架で運ばれた。川副は重傷であったが、航空便もなかったので、五〇号に乗って横須賀に向かうことになった。補給を受けた後、酒井中尉が操船して21:30横須賀に向け出港した。18日に浦賀に到着し、川副は横須賀海軍病院に入院したという。

このように、1944年の6月初めの時点で、潜水艦や艦上機の攻撃が激しく、サイパンへの輸送作戦は無理な状態であった。しかし、日本軍は十分な航空戦力や護衛艦艇もつけずに輸送作戦を強行し、一万名近い陸兵や物資、輸送船、護衛艦艇のほとんどを喪失させた（沈没した25隻以上の船舶の乗員を加えると戦死者は1万数千人にのぼる）。航空戦力がありながら輸送作戦に積極的に協力させなかった理由は、航空機の温存のためとガソリン・弾薬などの不足が考えられる。来るべき「あ号作戦」のためには基地航空戦力と空母機動部隊の艦載機の協力が不可欠であった。しかし、5月27日のアメリカ軍のビアク島（ニューギニアの北）上陸に対応し、航空戦力を南に投入せざるを得なくなった。6月11日（米軍のサイパン上陸に4日前）にサイパン（マリアナ全体か？）には136機、パラオには155機の航空兵力があったとされている（防衛研修所戦史室、1968）が、輸送作戦に協力した記録はない（温存した航空戦力も米機動部隊の艦載機の攻撃などによりほとんどが失われた）。

ガソリンや弾薬などのついては、パラオの六七一空（航空隊）司令の「5月26日、燃料在庫極少、陸軍のものを分けてもらった」との記録や、パラオの魚雷が63本、ヤップの魚雷が20本であったとの記録から、不足していたことがうかがえる（防衛研修所戦史室、1968）。油槽船（タンカー）の状況を見ると、1944年1月に海軍が保有した油槽船は48隻であったが、同年3月までに潜水艦（7隻）や空襲（3隻）などにより14隻が失われ、34隻

になっていた（防衛研修所戦史室、1968）。そのため、「あ号作戦」に備えて日本海軍は、ボルネオの油田に近いフィリピン南端の島であるタウイタウイを拠点にせざるを得なかった（「あ号作戦の決戦場と目された西・東カロリンには近いが、実際に戦闘が行われたマリアナとは約3000 km離れていた）。燃料である油が艦隊作戦行動の大きな制約となっていたのである。ガソリンの補給についても同様な状況であったことが想像され、航空戦力の作戦行動は制限され、輸送船団の護衛の任務にあたれなかったと考えられる。1942年のミッドウエイ海戦においては、空母上空で護衛にあたっていた戦闘機部隊がアメリカ軍の爆撃機や雷撃機の多くを撃墜したが（結果的には隙をついた急降下爆撃機により空母は炎上・沈没した）、輸送船団に護衛の航空機をつける余裕は1944年当時の日本軍にはなかったのだろう。

輸送船団が潜水艦や艦載機の攻撃を受け大損害をうける状況により、「サイパンへの逆上陸作戦」を主張していた大本営もサイパン奪還をあきらめ、硫黄島を増強する作戦に切り替えるようになった。サイパン奪還のために集められた兵や物資は「伊号作戦」などとして硫黄島に送られることになる。次章ではこのことについて述べる。

余談であるが、駆潜艇五〇号の最期について述べる。横須賀で修理ののち、酒井中尉が艇長代理となり7月15日東京出港、17日父島に入港した後対潜掃討を行い、19日再び父島に入港した。20日夕刻、山の方より曳光弾を認めたと見るや、直ちに応戦したが、爆弾1発が後部機雷庫に命中した。幸い誘爆は免れたが、後部より浸水したので、翌21日、第一トンネル脇の浅瀬に座洲させるため、曳船で曳航した。前部は座洲したが、後部は40 mの水深があったので次第に沈下し、そのまま深みに落ちて全没下。死者16名であったという（川副、1990）。現在、製氷海岸沖の漁協のいけすの下に五〇号は沈んでいる。

IV. 第十一水雷戦隊による硫黄島への輸送作戦

1944年6月25日から7月3日にかけて行われた硫黄島への輸送作戦、伊号輸送作戦を見てもみよう。伊号輸送作戦の経過については木俣（1986）が詳しく述べているが、残念ながら原論文が明確にされていない。ここでは日本海軍第十一水雷戦隊の戦闘記録（日本海軍第十一水雷戦隊司令部、1944）を中心に、輸送船団に対する護衛体制について述べる。

伊号輸送作戦に従事した艦船は以下の通りである。

軽巡洋艦 長良（旗艦）（14センチ砲5門、12.7センチ高角砲2門、魚雷発射管8門）、木曾、多摩（14センチ砲七門、8センチ高角砲4門、魚雷発射管8門）すべての艦に対潜水艦装備あり
駆逐艦 若葉、初春（12.7センチ砲5門、魚雷発射管6門）、旗風、汐風、皐月、夕月（12セ

ンチ砲4門、魚雷発射管6門)、冬月(10センチ砲85門、魚雷発射管4門)、松(12.7センチ砲3門、魚雷発射管4門)すべての艦に対潜水艦装備あり

海防艦 四号 対潜水艦装備あり

一等輸送艦 四号(12.7センチ砲2門) 対潜水艦装備あり

二等輸送艦 一〇四号、一五二号、一五三号(8センチ砲1門)

特設輸送艦 能登丸

一等輸送艦は、上甲板の後部が傾斜面をなし、そのまま海面に達している艦艇で、一四米特型運貨船4隻または二式内火艇(水陸両用戦車)7機を搭載し、艦尾から直接進水させ、物資をスムーズに運搬できる(「海軍」編集委員、1981)。

また、二等輸送艦は日本版LST(戦車揚陸艦)で、昭和18年に計画され、SB艇(Sは戦車、Bは海軍のこと)と称された。海岸の砂浜に直進擱座し、船首の扉を開いて戦車部隊などを揚陸できる(落合、1974)。

このように、護衛艦艇と輸送艦の数がほぼ同数で、しかも火力を持ち、素早く物資の揚陸が可能である輸送艦を用いたことを考えれば、海軍がこの輸送作戦を成功させるべく対応していたことがわかる。

また、当時、アメリカ海軍潜水艦の活動が活発であり、父島付近に3隻以上、硫黄島付近に2~3隻が行動していた。そのため、航空機による警戒も行っている。当時、父島には零水(零式三座水上偵察機、3人乗りの水上偵察機)3機と水戦(二式水上戦闘機、零戦にフロートを付けた水上戦闘機)8機が父島に進出し、実働可能であった。これらの航空機が以下のように警戒に当たる計画を立てていた。

「伊号作戦部隊の警戒要領

一、第一輸送隊 30日04:00より入港時まで零水延3機、水戦延4機。

二、第二輸送隊 1日04:00より入港時まで零水延4機。

三、第三輸送隊(硫黄島行) 29日08:30より22:00まで零水延4機。30日07:00より17:00まで水戦延8機、零水1機。1日04:00より入港時まで水戦延8機。」(6月29日18:17 父島基地からの電文)」(注:カタカナをひらがなで表記し、日時や個数などは漢数字からアラビア数字に変え、句読点を追加した)

第一輸送隊が長良、冬月、松。第二輸送隊が木曾、多摩、若葉、初春。第三輸送隊が旗風、汐風、皐月、四号、一〇四号、一五二号、一五三号、能登丸で、実際に硫黄島に輸送

を行ったのは第三と第四輸送隊である。

このほかに「硫黄島に派遣されていた父空（父島航空隊）の艦攻（艦上攻撃機「天山」）が29日に輸送部隊警戒のため父島に進出する」と五二空（硫黄島の航空隊）が連絡している。

前述した三五三〇船団や四六一一船団、後述する第四八〇四船団に比べ、火力、対潜水艦能力、揚陸能力、航空勢力すべてにおいて充実した護衛体制に基づいた作戦であった。

また、硫黄島に揚陸する手順を以下のように打ち合わせていた。

「本島における揚搭に関しては、水雷戦隊参謀と打ち合わせ遂げたるも左記のごとく

一、SB（注：二等輸送艦）揚陸点は天候変なき限り南海岸とし、信号旗をもって標示。沖より岩に向かって右より番順とす。

二、派遣揚陸作業司令官の位置は到着海岸の中央として「H」旗をもって標示。

三、SBは艦首及び中央部左右に繫留索し、海岸突入後船体を繫止す。

四、二四号海防艦は満潮時に船体の一部を海面に露出しあるも念のため「B」旗をもって標示。

五、南海岸最南端到着点に向かって左端より約150mの砂浜に敵潜は実装魚雷2個跳出し、危険につき近接せざるを可とす。「B旗」（赤燈）をもって標示

六、今早暁見張員は播鉢山付近海面に霧頂敵潜を認め、周辺飛行制圧中」（6月29日20:35 硫黄島基地からの電文）」

ここで、それぞれの輸送隊の行動を見てみよう。

第一輸送隊（長良、松、冬月、四号輸送艦）

6月30日父島着。長良と松は7月1日00:00父島発。冬月と四号輸送艦は0150父島発。

冬月に搭載した陸兵と物資は父島で輸送艦に移乗し、硫黄島に揚陸することになった。

第二輸送隊（木曾、多摩、若葉、初春）

7月1日1742父島着、2日00:00父島発（木俣（1986）は若葉と初春は直接硫黄島に向かったと述べている）。

第三輸送隊（旗風、汐風、海防艦四号。能登丸）

6月28日に東京湾を出発した第三輸送隊は6月30日05:00に父島に到着。しかし、08:00に出航予定であったが、能登丸の荷役が遅れたため、13:30、輸送隊と一〇三号輸送艦（父島で待機していたので追加された）は硫黄島に向かった。7月1日06:25、一〇三輸送艦が陸搭終了後の際、潮流のために横倒しになりそのまま砂浜に打ち上げられた。

しかし、06:40、大発（小型の上陸用舟艇）で離岸に成功した。その後、部隊はGF（聯合艦隊）の命を受け、列島線付近及び当方海域に出現している敵潜水艦を避けるため、西方大迂回航路をとった。旗風、汐風、能登丸、四号海防艦は7月1日10:00父島に到着し、任務を完了した

第十一水雷戦隊の記録には一〇三輸送艦の帰投の記録はない。伊達（1974）によると一〇三輸送艦は7月4日、硫黄島付近で敵機の攻撃を受けて沈没している。

戦史叢書「中部太平洋陸軍作戦2」（防衛庁防衛研修所戦史室、1966）によると、能登丸に乗船していたのは歩兵第四百四十五聯隊、独立速射砲第八～十二大隊、中迫撃砲第三大隊となっている。同書の「硫黄島守備部隊（陸軍）進出状況一覧表」によると、第三輸送隊に乗っていた特設第二十機関砲隊（63名）、同二十一機関砲隊（60名）、噴進砲中隊（51名）が7月1日父島に上陸し、7月16日父島を出港し同日中に硫黄島に上陸している。

第四輸送部隊（一五二号以外の船名の記載なし。夕月、皐月、清霜、一〇四号、一五三号と思われる。）

7月1日0527硫黄島に向け父島発。1430硫黄島着岸。一五二号に引き上げ島民195名を便乗させ、1915父島に向け発。（木俣（1986）は、空襲により皐月が至近弾を受け小破したと述べている）。

他に一〇五特設輸送艦が単独で輸送し、帰投している。

また、伊達（1974）によると伊号作戦の艦船に入っていないが、一三〇号輸送艦が7月4日に硫黄島付近にて敵機の攻撃を受け沈没している（後述）。父島から輸送作戦に参加したのだろう。

さて、軽巡洋艦3隻は父島に到着し、物資を下ろした後、硫黄島には行かずに帰投している。火力や魚雷、対潜水艦装備を持ちながら、硫黄島への輸送あるいは護衛を行わなかったのは非効率であるように思える。当時、父島の二見港には水上機用のスロープがあったが、岸壁や大きな栈橋は無かったので、木曾などの軽巡洋艦は二見湾内に停泊し、搭載していた中発（上陸用舟艇）などで物資や兵員を陸揚げした（木俣、1989）。その後、物資や兵員は機帆船や輸送艦を用いて硫黄島に送っている。父島と同じく硫黄島にも栈橋は無かったので、物資や兵員を硫黄島まで直接運べば効率的である。なぜ、わざわざ手間のかかる方法をとったのだろうか。

当時の日本海軍は「軍艦」は天皇陛下から賜ったものとして、喪失することを極度に恐れた。軽巡洋艦（排水量5500トン以上）は「軍艦」であり、駆逐艦（排水量）や輸送艦は「軍艦」には入っていない。そのため、硫黄島への輸送という危険な任務は駆逐艦や輸送艦に任せ、軽巡洋艦は比較的安全な父島までしか行かなかったのだろう。また、軽巡洋艦

には水中聴音機や水中探信儀、爆雷を装備していたが、船体が長いため（水線長159 m）小回りがきかず、駆逐艦（100 m前後）や駆潜艇（49 m）、海防艦（68 m）に比べて対潜水艦戦闘は不向きであった。そのこともあり、硫黄島への護衛に軽巡洋艦は同行しなかったであろう。対潜水艦戦闘の詳細については次の章で述べる。

V. アメリカ海軍潜水艦による輸送船団への攻撃

1944年7月18日、父島の北西約290 kmで硫黄島へ独立混成第十七聯隊、戦車第二十六聯隊（隊長はロサンジェルス・オリンピック馬術金メダルのパロン西こと西竹一中佐：当時、のちに大佐）、独立臼砲第二十六大隊の主力を運ぶ輸送船・日秀丸がアメリカ海軍の潜水艦により沈められた（犠牲者は少数であったが、戦車28両が失われた）（防衛研修所戦史室、1968）。この章では潜水艦と護衛艦との戦闘について、日秀丸に乗船していた東倉勉一（陸軍硫黄島派遣独立混成十七聯隊）と川相昌一（独立混成第十七聯隊の通信隊）、四号海防艦に乗船していた寺島健次海軍少尉の記録を元に述べる。

7月15日未明、船団は横浜を出航した。輸送船は日秀丸、八祥丸、桂川丸、雲海丸（東倉、1990）、護衛艦艇は四号海防艦、二号輸送艦、一五〇号駆潜艇、五一号駆潜艇などであった（寺島、1977）。

17日夜、父島の西北100海里（190 km）付近で、後方を進んでいた駆潜特務艇が爆発撃沈された。潜水艦による攻撃のようだった（寺島、1977）。

18日、船団は北緯28度40分、東経139度25分、父島北西250 kmの海域にさしかかった所（注：18日寺島記録の父島からの距離より大きくなっていし、防衛研修所戦史室の記載とも若干異なっている）で、東倉は潜水艦の潜望鏡を発見した。日秀丸の機関銃が砲撃すると潜望鏡は海中に没し、その直後、船尾に2本の魚雷が当たった。（川相は1本目の魚雷が当たったのが、朝7時15分、10分ほどしてまた後部に魚雷を受けたと述べている（川相、2006））。船体には海水が流入し、「総員退艦」の命令が出て、東倉は救命胴衣を着て海に飛び込んだ。

四号海防艦の寺島も潜望鏡らしきものを発見したが、十分確認できなかった。その後、ズシンという衝撃を感じ、見ると第十雲洋丸（注：雲海丸のまちがいかな？）がやられていて、次に日秀丸がやられたと述べている。何組かの筏が組まれて海上に浮かべられ、やがて船が沈むと陸兵たちは筏に乗り移った。海防艦や駆潜艇が救助に向かうと、陸兵たちは海に飛び込み、艦から下ろされた縄梯子にすがりついた。救助の途中、再び潜水艦が襲ってきたので、救助を中止し、爆雷戦を行うことになった。縄梯子にすがり付いている陸兵たちに手を離すように叫んだが、手を離さなかった。艦が速度を上げると陸兵たちは振り

落とされてしまった。爆雷戦の様子を引用し、その戦闘方法を見てみよう。

「第二戦速。いそげ！」

「雷跡」(潜水艦が魚雷を発射した)

「面舵。第一投射法！投射用意」(爆雷は投射機から発射するか、スロープを転がして投射する)

「用意よし。潜水艦音近い」(水中聴音機または水中探信儀で潜水艦音を探知して近いことを知った)

「探信儀あげ。ヨーイ、テ」(海中に沈めていた水中探信儀を引き上げ、爆雷を投射した)

こうして20発の爆雷が投下された。

父島西方15海里(約28 km)まで来たとき護衛の味方飛行機(東倉によると双発の一式陸上攻撃機と九六式陸上攻撃機が飛来したという。注：硫黄島から飛来したものと思われる)が降下してきて発炎筒を投下して敵潜水艦がいることを示した。そこで、救助した陸兵を満載し、転舵も十分できない状態で爆雷を投下した。大きな気泡が湧き上がったので、撃沈確実と報告した(注：潜水艦が破壊されると、空気や油、搭載品が浮かび上がるので、それを目安に撃沈を判断する)。

ところで、海に飛び込んだ東倉は筏に身をまかせ、海上を漂っていた。海軍艦艇は間歇的に爆雷を投下するために海面をぐるぐる回っていた。やがて、搭載汽艇(ランチ)やカッターがやってきて陸兵を拾っていった。東倉は泳いで救助を求めたが、ランチやカッターは満員でなかなか救助されなかった。かなり時間がたち、精魂尽き果てたころ、ランチの水兵に頭をたたかれ正気に戻り、救助された。6時間も海中にいたとのことだった。

東倉は海軍艦艇に一時収容されたが、中型の輸送船に移乗させられた。そこでまた、雷撃を受けたが、船が回頭したことにより回避することができた。やがて二見湾に近づくと水上飛行機が警戒していたり、小さな発動船が防潜網をはずしたりして、警戒していた。入港して投錨したが、通船や栈橋が開くのに待たされた後、大発(上陸用舟艇)に乗り、木造栈橋に到着した。

川相も救命胴衣をつけて海面に浮かんでいたが、海軍艦艇は爆雷攻撃をされていてなかなか救助に来なかった。何時間も救助を待っていたら、駆潜艇が投げた綱につかまり引き上げられた。甲板には救助された陸兵がたくさんいて、海面には被害者の遺体が浮いていた。ようやく父島が見えたところで4本の魚雷攻撃を受けた。駆潜艇は右旋回したため、魚雷は前後に2本ずつ通り過ぎていった。船は二見湾に入港し、夜、大発艇に乗り込み、父島に上陸したという。

このように3人の記録から、輸送作戦で敵潜水艦がいかに脅威であったかが良くわかっ

た。敵潜水艦は護衛艦が見守る中、大胆にも輸送船近くに潜望鏡を上げ、魚雷を発射している。寺島は爆雷により潜水艦を撃沈確実だとしているが、実際には敵潜水艦は逃げのびている（木俣、2008）。日本の対潜水艦装備はアメリカに比べ遅れており、当時、多くの駆逐艦や海防艦、駆潜艇が装備していたのは1933年に採用された九三式水中聴音機と九三式水中探信儀であった。1943年に採用された三式水中探信儀や1944年に採用された四式水中聴音機は、以前の物に比べれば高性能であったが、一部の駆逐艦・海防艦・一等輸送艦などにしか装備されなかった（木俣、1999）。四号海防艦艦長の水谷も「九三式二型水中聴音機はまず役に立たず、九三式一型水中探信儀もきわめて精度が悪く不安だった。そこで登場したのが、三式探信儀だったが、故障が多く「故障三式」というニックネームがついたが、特に進言して四号に装備してもらった」と述べている（佐藤、1983）（ちなみに三式探信儀を使いこなした四号海防艦は1944年11月11日、八丈島沖で米潜水艦スクヤムプScampを沈めている（木俣、2008）。その模様は佐藤や寺島が記述している）。

日本海軍の駆逐艦が沈めた敵潜水艦は10隻（木俣、1999）、海防艦は8隻、駆潜艇は6隻に過ぎない（木俣、2008）。逆に英・米・オーストラリア駆逐艦により沈められた日本の潜水艦は62隻に上る（木俣、1999）。この差は水中聴音機と水中探信儀の性能が原因だと考えられる。旧式は精度が悪く、新式は故障が多いでは、潜水艦の位置を正確に捉えるのは難しく、爆雷を潜水艦の25 m以内で爆発させるのは至難の業であったらう。

駆逐艦は爆雷を36個程度（吹雪型、陽炎型の場合）、一三号型駆潜艇は36個、丁型海防艦（四号海防艦など）は120個、一等輸送艦は18個搭載できた。それに対しアメリカ海軍の代表的駆逐艦のフレッチャー級は26個であった。アメリカ軍駆逐艦の搭載爆雷数が少ないのに多くの日本潜水艦を沈めたのは、ソナーにより潜水艦の位置を特定し、的確に爆雷を投下できたからであろう。

VI. 父島から硫黄島への輸送

父島で降ろされた兵と物資はどのようにして硫黄島に運ばれたか、陸軍小笠原兵団の参謀であった堀江芳孝少佐の記録を見てみよう（堀江、1965）。堀江少佐は小笠原兵団長栗林忠道中将（当時、後に大将）の命を受け、父島から硫黄島への輸送を担当した。サイパンが陥落（1944年7月7日）した後、B-24（愛称リベレーターLiberator、コンソリーデッド社製の4発の重爆撃機、航続距離3380 km）が昼間に襲来するので、昼間の荷役作業が不可能になった。そこで、夜に大きな船から荷物を大村海岸に降ろし、トラックで山中に運んで隠した。翌晩トラックで機帆船、漁船に分載し、母島を経由して硫黄島へ運んだ。父島守備隊から約3千人の作業員、トラック50台を出し、必死に作業を行ったとのことである。

兵器廠要員として昭和19年11月に赴任した中村信大尉も空襲を受けながら荷揚げ作業に当たり、あるとき敵機の攻撃により貨物を半分残した大型輸送船が目の前で轟沈してしまったと述べている（中村、1969）。

6月15日、16日、24日、7月4日の機動部隊による空襲・空中戦により、硫黄島八幡部隊の航空戦力はほぼ壊滅（進出機数232機が可動機0になった）（防衛研修所戦史室、1968）、父島の水陸機も数機を残し壊滅し、制空権を奪われ、さらに敵潜水艦が出没する状況では、発見されやすい大型艦船による父島への輸送はかなり危険を伴う。そこで機帆船や漁船による輸送を行わざるを得なかったのである。

しかし、輸送艦による輸送も行われた。特に大型船が着岸できる栈橋の無い硫黄島の南海岸（アメリカ軍が上陸した場所でもある）に直接の乗り上げ、戦車や大砲などを揚陸することが可能な二等輸送艦（950トン、水線長76m、搭載能力220トン）が用いられた。

海軍陸戦隊として硫黄島第三次増援隊に加わった橋本衛上等兵曹は、8月10日、軽巡洋艦「木曾」に数百人と共に乗り込み、12日夕刻父島湾内に到着し、大発に便乗し父島に上陸した。13日夜、二等輸送艦に乗り、14日夕方、硫黄島に到着した。硫黄島には大発や漁船が横付けできる50m程の木製の上陸栈橋があり、彼らは南上陸栈橋に上った。輸送艦

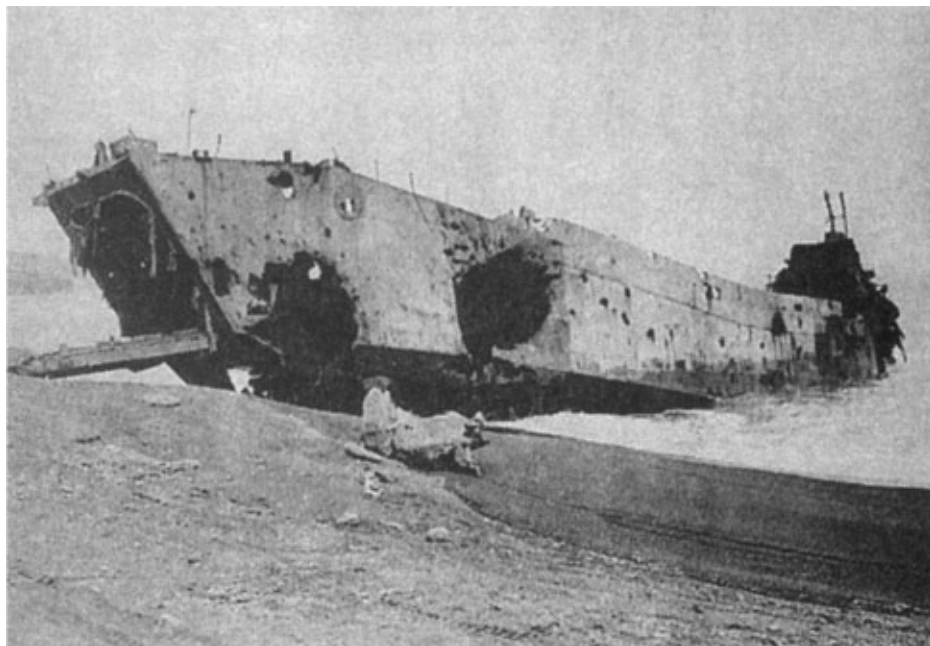


図1 硫黄島で揚陸後破壊された二等輸送艦

艦首の門扉が開いたままで、艦体には大きな穴が二つ開き、機銃で開けられた穴がいくつも認められる（堀江、1965）

は陸に乗り上げ、前端のハッチを開け、戦車や砲を揚陸した。何台ものトラックがやってきて、兵や物資を運搬した（橋本、2001）。

橋本たちは無事に硫黄島に上陸できたが、何隻もの輸送艦が硫黄島や父島付近で撃沈されている。落合（1974）はその惨状を次のように述べている。

「硫黄島で本艦が接岸擱座可能なのは、南揚陸場とよばれた幅250メートルの砂浜だけしかなく、ここに内地から物資を積載し出撃してきた二等輸送艦が相並んで揚陸を行なう光景がつづいた。

とうぜん、そこは米側のねらう所となり、猛烈な空爆、砲撃が行なわれた。しかし場所を変えることはできない。そのため二等輸送艦の被害は相ついで、まさに消耗品であった。

まず7月4日、130号が被爆沈没したのを皮切りに、133号、134、157号、132号、154号などすべて同一地点で揚陸中、爆撃あるいは砲撃をうけて喪失した。

とくに最初に被爆沈没した130号の船体上に、133号が馬乗りの状態になったまま爆撃をうけて沈没するなど、凄惨な場面もあり、その戦闘の激しさを物語っている。」

以下の輸送艦が父島、硫黄島付近で撃沈・損傷されている。

- | | | | |
|-------|------|-------------|--|
| 一等輸送艦 | 二号 | 1944. 8. 4. | 兄島滝之浦湾にて艦載機爆撃により擱座 |
| | 四号 | 1944. 8. 4. | 父島扇浦にて艦載機爆撃により擱座（父島特別根拠地隊、1944） |
| | 七号 | 1944.12.27. | 硫黄島での荷役中、艦砲射撃により擱座 |
| | 八号 | 1944.12.24. | 硫黄島からの帰途、父島南南東にて艦砲射撃により沈没 |
| | 一三号 | 1945. 2.11. | 硫黄島にてB-25（愛称ミッチェルMitchell、ノースアメリカン社製の陸軍双発中型爆撃機）により被弾し中破 |
| 二等輸送艦 | 一〇三号 | 1944. 7. 4. | 硫黄島付近にて敵機の攻撃を受け沈没 |
| | 一〇五号 | 1944. 9. 1. | 父島において艦砲射撃により小破 |
| | 一〇六号 | 1944.10. 9. | 硫黄島において荒天のため損傷 |
| | 一〇七号 | 1945. 1. 5. | 母島西岸において艦砲射撃により沈没 |
| | 一三〇号 | 1944. 7. 4. | 硫黄島で揚陸後、出港時に一〇三号の錨綱がスクリューに絡みつき、除去作業中に敵艦上機の攻撃、艦砲射撃を受け炎上して沈没 |
| | 一三二号 | 1944.12.27. | 硫黄島にて敵機及び艦砲射撃により沈没 |
| | 一三三号 | 1944. 8. 4. | 硫黄島にて艦上機の攻撃を受け、至近弾及び荒天のため横倒しになり擱座 |

上條：硫黄島輸送作戦と父島

- 一五二号 1944. 8. 4. 硫黄島にて艦上機の攻撃を受け、至近弾数十発及直撃弾2発を受け沈没
- 一五三号 1944. 9.19. 父島二見港にて敵機と交戦し小破
- 一五四号 1945. 1. 5. 硫黄島においてB-24数十機の爆撃を受けた後、巡洋艦3隻、駆逐艦4隻の艦砲射撃を受け、沈没
- 一五七号 1944.12.24. 硫黄島において大型機の爆撃を受け、巡洋艦3隻、駆逐艦5隻の艦砲射撃を受け、沈没（伊達、1974）

終戦までに就航した一等輸送艦21隻のうち4隻、二等輸送艦69隻のうち8隻が父島・硫黄島付近で喪失している。まさに硫黄島輸送作戦は輸送艦の犠牲のもと行われたのであった。

一等輸送艦二号と四号は、今もばらばらになった船体を見ることができる。二号は兄島滝之浦海岸近くに擱座し、海岸中央すぐ近くの海面にボイラー、海岸の北西側に12.7糎（センチ）高角砲の砲身（連装）が残されている。四号は父島扇浦の約300 m沖、約10 mの水底に沈んでいる。船首はほぼ原型をとどめて残っており、錨に繋がれた鎖などもよく残っている。それより後部はばらばらになっているが、艦橋の前に設置された12.7糎連装高角砲が基部ごと抜け落ち、横倒しになっている。また、煙突の一部と思われる部分や、25 mm連装機銃などが残っている。船尾には2組の軌条（内火艇などを降ろすためのレー



図2 滝之浦海岸に残る二号一等輸送艦の12.7センチ高角砲の残骸（2010年6月撮影）

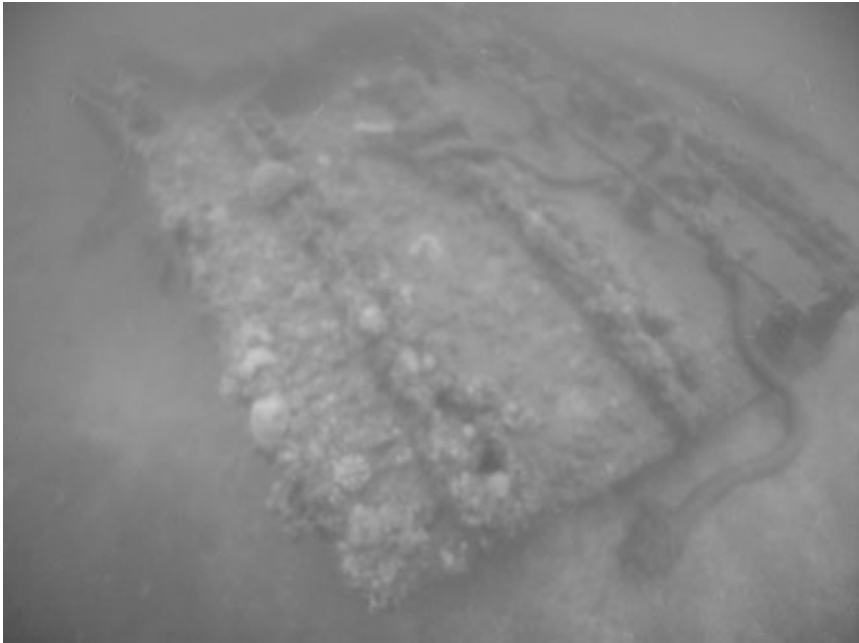


図3 扇浦に沈む四号一等輸送艦の最後部にある軌条（搭載した舟艇を降ろすレール）（2010年7月撮影）

ル）がよく残っており、この船の特徴がよくわかる。

二号と四号の沈没については、父島特別根拠地隊の戦闘記録に記載されているので、引用する。

「8月6日、1:800 父特根、発四号輸送艦航海長佐々木大尉（艦長職務執行）

4日10:20兄島西方海面に於いて敵機約35機と交戦、11:30艦橋に被弾大破炎上。二見湾扇浦に搁座せしめ、消火の上、一部の兵器、弾薬を揚搭す。5日砲爆撃により（注：後述する聳島沖砲撃戦の翌日、米艦隊が行った父島・兄島に対する砲撃）18:00沈没す。戦死艦長以下士官5名、下士官兵70名、戦傷航海長以下士官下士官44名、生存者は父特根に収容さる。機密書類及暗号書類は全部爆碎並びに焼失。」

「(父島特別根拠地隊の被害報告) 第二号輸送艦滝之浦湾に於いて被爆着底。」

また、当時19歳であった浅沼文雄も四号の座礁を目撃している。「ウイッ！ウイッ！と警笛を鳴らし、駆逐艦に似た軍艦が黒煙を吐きながら扇浦の大波止場の近くに挫礁する。爆撃を受けたらしく全身油に汚れた負傷者が次々とボートで運ばれ、小曲の陸軍病院へ担

架で運ばれていった。」(浅沼、1995)

一等輸送艦の乗員は148名、二等輸送艦は100名である(木俣、2008)。硫黄島輸送作戦で千名を越える乗員が犠牲になったと考えられる。いかに硫黄島輸送作戦が苛烈なものであったのか、理解できる。

Ⅶ. 第四八〇四船団の輸送作戦と対空戦闘

上條(2010)で、1944年8月5日にアメリカ海軍の任務部隊58.1.6(TF58.1.6)が行った父島に対する最初の艦砲射撃について述べたが、本稿ではその前日、第四八〇四船団への爆撃と、任務部隊58.1.6が第四八〇四船団に対して行った砲撃戦について述べる。

第四八〇四船団は高松一松少将の指揮の下、駆逐艦「松」が旗艦、護衛艦が他に駆逐艦「旗風」、海防艦四号、一二号、駆潜艇五一号、輸送船が昌広丸、利根川丸、延寿丸、第七雲海丸、竜江丸の計10隻であった(木俣、1986)。海防艦四号に乗艦していた寺島(1977)によると駆潜艇がもう一隻、輸送艦がもう一隻の計12隻であったという。四号は横須賀を7月28日早朝に出港、集結地の館山に向かい、合流後、硫黄島に向かった。午後には味方空母(木俣(1994)によると「瑞鳳」や「秋月」型防空駆逐艦(防空能力を高めた最新鋭の駆逐艦)2隻が同行した。しかし、これらの艦隊は船団の護衛ではなく、呉へ回航する途中に同行しただけであった。寺島はこの艦隊が哨戒していた敵潜水艦に発見され、敵機動部隊を引っ張り出してしまったとしている。木俣(1994)も米機動部隊司令官ミッチャー中將が「瑞鳳が小笠原にいる」と誤った情報を元に第1空母部隊(クラーク少将)と第2空母部隊(モンゴメリ少将)を派遣したとしている(残念ながら、引用文献が明確に示されていない)。「父島特根拠地隊戦闘詳細 第四号」(日本海軍父島父島特根拠地隊司令部、1944)によると海護総司が8月2日18:42に「父特根司令官」や「松」「瑞鳳」などに発した電文によると「左記通信諜報より警戒の要ありと認む。01:40北緯30度東経141度(相当誤差あり)に測定せる敵潜の作戦特別緊急信二通は06:30「ハワイ」「マリアナ」方面航空部隊指揮官及策動中と認められる有力艦宛転送せられたり」とある。この潜水艦が「空母部隊が小笠原に向かう」と打電したのだろう。

前島によると、そうとは知らぬ船団は8月2日に父島に入港、四号は別に2船団を護衛して硫黄島に向かった。3日に「どうも敵の状況がおかしい。すぐ父島に戻れ」と連絡を受け、父島に戻った。4日の朝、荷役を終えた輸送船6隻を護衛して横須賀に向けて出港した。

その後、アメリカ軍艦上機が硫黄島、父島、母島及び船団に襲いかかった。「父島特根拠地隊戦闘詳細 第四号」の「松」発の電文を引用する。

4日 10:53 「敵飛行機20機見ゆ 10:53」

4日 11:03 「船団北西方に待避せしむ」

4日 12:02 「第一次戦闘に於て敵グラマン延50機と交戦、5機撃墜確実。駆潜五一爆撃により沈没したるものの如く。その他の船団被害なし。船団進路315度、速力9節にて待避中」

4日 12:50 「敵飛行機10機南に向かう」

4日 13:40 「1:255より13:40迄敵戦闘機爆撃機延30機の攻撃を受く。戦果、被害なし。駆潜五一健在なり」

4日 15:20 「30機来襲」

4日 16:49 「第三次戦闘に於て16:00より16:35迄の間に艦爆（注：艦上爆撃機）艦攻（注：艦上攻撃機、魚雷攻撃を行う）延50機の攻撃を受け、商船2隻沈没、1隻大破。敵なお攻撃中」

4日（時刻記録なし）「敵巡洋艦、駆逐艦10隻の砲撃を受け、交戦中」

4日 18:40 「我敵巡洋艦の砲撃を受く」

以上で「松」からの電信は途切れている。

四号海防艦の前島の記録で艦載機との戦闘を見てみよう。父島より空襲警報が伝えられ、もはや父島には戻れないと考え、一路北上を続けた。10:30頃、「配置につけ」の号令が発せられ、その後、第一波の数十機の敵機が襲いかかった。船団は輸送船を中心に右側に「松」「一二号海防艦」駆潜艇、左側は「旗風」「四号海防艦」駆潜艇の順で並んでいた。第一波、第二波のあと、第三波がすさまじい勢いで襲いかかった。6～8千トンの輸送船が一隻は真っ二つに折れ沈没し、別の一隻が船首を海面にあげてまっすぐに海中に、また一隻はもうもうたる火を噴きながら走っていた。戦闘機グラマンF4F（注：F6Fのまちがいか？当時の主力はF6Fヘルキャットであった）が突っ込んできて、敵弾が艦橋に飛び込んできて、3人がたおれた。一人は腹部貫通で下半身は血まみれ、顔面蒼白であった。艦橋は負傷者が横たわり、血が床を洗い、艦が傾くたびに血が流れる状況であった。敵機が去ったところで、近くにいるは「松」「四号海防艦」「一二号海防艦」「利根川丸」の4隻になっていたという。

四号海防艦の艦長であった水谷勝二少佐によると、第一波は父島北西20海里（37km）で敵機は30機で、右艦首と艦尾に至近弾で穴が開き若干の浸水、後部13耗機銃員2名戦死、1名重傷の被害を受けた。13時に第二波約30機、続いて16時に第三波50機が来襲し、輸送船団は次々に沈没した。四号は敵機4機を撃墜したが、戦死者2名、重軽傷者20名を出したとのことである（佐藤、1983）。

すさまじい敵機の攻撃を受けながら、4隻が残ったのは幸運といわざるを得ない。「松」

の主砲は12.7糎高角砲3門であり、主砲が高角砲の駆逐艦は「松」型と「秋月」型だけであり、25 mm機銃が24門と多かった。また、丁型海防艦（四号、一二号）は12糎高角砲2門、25 mm機銃を6門持っていた。「松」型駆逐艦も丁型海防艦も大戦中に設計され造られたので、小さい体には防空能力が高かった。そのため、敵機の攻撃をかわし、生き延びることができたのであろう。

Ⅷ. 聶島沖砲撃戦

敵艦載機の攻撃をしのいだ4隻であったが、夜に入りさらなる試練が待っていた。前島の乗った四号海防艦が聶島列島付近を北上中に「敵の有力なる水上部隊数十隻北上中」との緊急電が入った。父島特別根拠地隊の記録によると、父特根司令部が16:02に「松」などに発した電文に「父島の90度、3万m付近、敵巡洋艦ならびに駆逐艦らしきもの10隻見ゆ」とあるので、四号が受け取ったのはこの電文であろう。

前島の記録を元に敵艦隊との戦闘の様子を見る。水平線上に敵巡洋艦・駆逐艦からなる水上艦隊が現れ、パツ、パツと夕闇せまる水平線に閃光が光った。「右砲戦。徹甲弾にかえ！」と館長の号令が下った（注：12.7糎高角砲は、平射も可能であったので、艦隊との砲撃戦に使用できた。これまでは、対空戦闘だったので上空で炸裂する対空弾を使用していたが、艦船の鉄板を突き破って爆発する徹甲弾に変更した）。しかし、高角砲（注：5インチ、最大射程1520 m）は2門しか無く、敵の巡洋艦のいる敵巡洋艦のいる海面まで届かない（注：巡洋艦の主砲は重巡洋艦が8インチ（20 cm）、軽巡洋艦が6インチ（15 cm）だったので、射程距離に差があり、届かない）。射程内に入っても、20ノットの海防艦と35ノット以上出る巡洋艦では勝負にならない。その時「松」から電文が入った。「四号海防艦は利根川丸を護衛し、戦場を離脱せよ。」その時、四号は利根川丸を単艦で護衛し、2千m離れた所に「松」と「一二号海防艦」がいた。そのうち、「四海防、四海防」と呼出符号があり、しばらく途絶えた後、「われ敵巡洋艦と交戦中。只今よりこれに突撃…」と打電してきて、ぱつと海面が明るくなったかと思うと、途切れてしまった。目をこらせば、ひびきわたる砲声のなかを、まっすぐに敵艦に向けて火を噴きながら突撃する駆逐艦「松」の勇姿がはっきりと見えていた。8月4日19:40のことであったという。

前掲の「松」発の最後の電文「我敵巡洋艦の砲撃を受く」が18:40、「聶島見張所の19:00の電文によると「敵巡洋艦4隻、駆逐艦4隻、聶島よりの230度2万米にて砲戦。味方艦1炎上しつつ（2語不明）全速（以下11語感なし）」とある。これから判断すると一時間ほどの砲撃戦の後、「松」は敵艦隊に突撃することで、他の船を守ったとのことになる。

この砲撃戦をアメリカ海軍艦隊司令部による戦闘記録（United States Fleet Headquarters

of Commander in Chief, 1944) から見る。1944年8月4日から5日、アメリカ海軍任務58機動部隊は小笠原（硫黄島、父島、母島）を攻撃した。この攻撃の前、8時3分に、父島から日本の輸送船団が出航するのが発見され（偵察機からの報告と思われる）、昼には嫁島付近に到達すると予想された。そこで、船団を攻撃するために、巡洋艦部隊13（CruDiv13）を直ちに派遣することとした。TF58.1の駆逐艦部隊91（DesDiv91）と機動部隊58.3の駆逐艦部隊100（DesDiv100）も合流し、任務部隊58.1.6（TF58.1.6）が結成された。TF58.1.6の編成は以下の通りである（軽巡洋艦4隻、駆逐艦7隻）。

CruDiv13 旗艦軽巡洋艦オークランド（Oakland）司令官デュボース少将（T. DuBose）軽巡洋艦サンタ・フェ（Santa Fe）、モービル（Mobile）、ピロキシー（Biloxi）、駆逐艦ブラウン（Brown）
DesDiv91 駆逐艦イザード（Izard）、チャレット（Charrette）、バーズ（Burns）
DesDiv100: 駆逐艦コグスウェル（Cogswell）、ナップ（Knapp）、インガソル（Ingersoll）
（オークランドはオークランド級（6000トン、水線長165 m）、サンタ・フェ、モービル、ピロキシーはクリーブランド級の軽巡洋艦（10000トン、水線長183 m）、駆逐艦はすべてフレッチャー級（2000トン、114 m）であった）

敵の損害（艦船）

- ① 17:52 左にあった上陸用舟艇をブラウンの砲撃で沈めた。
- ② 18:50 左のガソリンか燃料油を運ぶ貨物船を巡洋艦と駆逐艦の砲撃で沈めた。
- ③ 21:20 左の上陸用舟艇をサンタ・フェ、モービル、ピロキシーの砲撃で沈めた。
- ④ 21:34 大きな駆逐艦あるいは「香取」級の軽巡洋艦を巡洋艦と駆逐艦の砲撃により沈めた。最後は舳先を50フィート（約15 m）海上に上げて沈んでいった。目標は2隻が近くにいたが、もう一隻も我々の一斉射撃で沈んだと考えられる（注：この「大きな駆逐艦」が「松」、もう一隻は逃げ延びた「一二海防艦」であろう）。
- ⑤ 22:24 約8500トンの貨物船がモービル、ピロキシーと駆逐艦の砲撃で沈んだ。オークランドが照明弾でうまく船を照らした。貨物船は炎上し、何回か爆発して船首から沈んでいった。
- ⑥ 05:49（翌8月5日） 上陸用舟艇がサンタ・フェの40 mm機銃により炎上した。
- ⑦ 11:25 二見港と兄島のいくつかの船に損害を与えた。砲撃中に沈没したものは認められなかった。

この後サンタ・フェによる具体的な説明が述べられているが、四八〇八船団に関係する部分を抜粋する（15～19の項目のみ記載）。

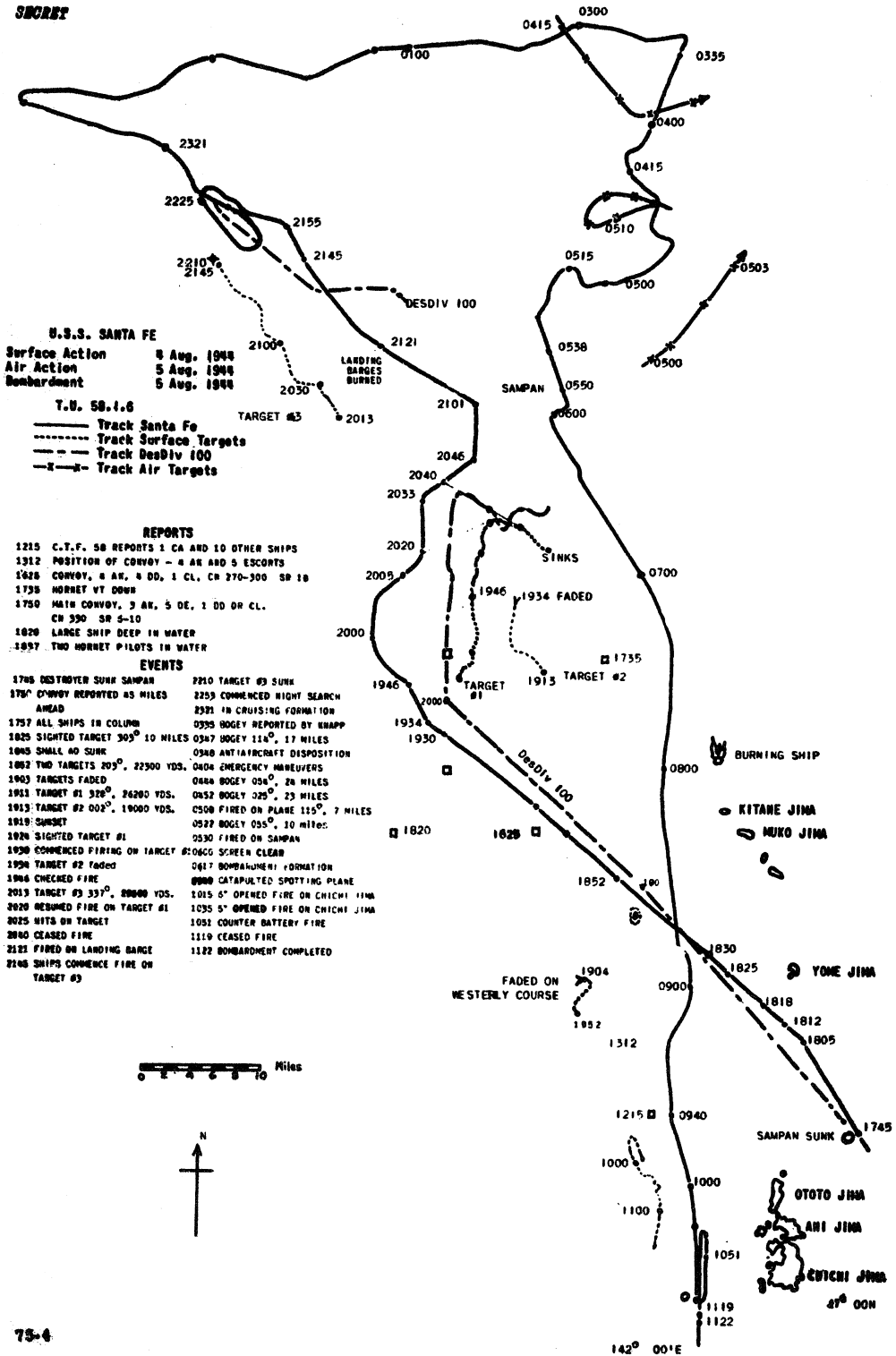


図4 サンタ・フェの行動記録 実線がサンタ・フェの航跡

- 15、19:11、水上レーダーは328度26200ヤード（24 km）の目標#1を捉えた。19:13に002度、19000ヤード（17 km）の目標#2捉えた。この2隻は連なって行動していた。19:19日没を迎えた。19:24に目標#1は000度7.5マイル（12 km）に至った。日本の駆逐艦隊がいろいろなコースで作戦行動をしていることを示している（注：日本軍の艦艇は敵潜水艦を避けるために「之の字運動」と呼ばれるジグザグの航路をとることが多いが、そのことを示しているのかもしれない）。
- 16、目標#1（012度、14900ヤード：約14 km）に対して砲撃を開始した。19:31には20ノットに速度を上げた。19:34に目標#2は028度28000ヤード：25 kmにおり20ノットでそのままのコースで走行していた。
- 17、目標#1への砲撃は巡洋艦が行っていた（注：射程の長い6インチ砲を用いたのだろう）。19:46には19000ヤード（17 km）の距離であった。離れた距離への砲撃はレーダーによる位置測定が有効であった。19:50に我々は25ノットに速度を上げた。
- 18、19:59、先頭にいたイザードが350度の方向17マイル（約27 km）の距離に目標#3を発見。20:06、後方にいたピロキシーも確認し20:13にレーダーで337度、29500ヤード（約27 km）にいたことが確認された。20:20、目標#1への砲撃を再開し、敵は二つの離れた砲塔から打ち返してきた（注：「松」級の高角砲は前方に1門、後方に2門あった）。いくつかの水柱があがり、至近弾も観測された。我々の6インチ砲はとても効果的であった。20:25に2発の命中弾が確認され、20:35に目標は050度に右転した。目標#1（115度、15200ヤード：14 km）への砲撃は続き、目標の速度は5ノットに落ちた。艦隊は砲撃しながら目標#1を追い、駆逐艦隊100は目標#1に近づいていった止めをさした。目標#1は吹雪級駆逐艦か香取級軽巡洋艦であると同定された。
- 19、20:46、進行方向を000に向け速度を20ノットにした。21:01、進度を300にし、速度を25ノットにし、目標#3を追った（中略）。21:28目標#3は275度、22000ヤード：20 kmにいて、21:45目標#3が264度、14600ヤード：13 kmに近づいた所でピロキシーとモービルが砲撃を行った。オークランドが照明弾を打ち上げ、目標#3は2艦の砲撃によって沈んだ。大きな輸送艦と同定された。これが発見された最後の船であった。

これ以後、夜明けにかけて、飛行機を発見したなどの報告が続くが、省略する。

なお、このときの戦闘過程を示した地図が報告書に残されているので掲載する（図4）。寺島の報告と照らし合わせて考えると、聳島北西約20マイルの目標#1が「松」、#2が逃げのびた「一二号海防艦」（地図にはFADE消えたと記されている）、さらに北西の#3は利根川丸、あるいは行方不明になった輸送船であろう。アメリカ軍が占領したサイパンと日本

の時差が1時間であるので、前島記録の「松」沈没時刻19:40、米国艦隊が目標#1を沈めたのが、20:35から20:46の間であるので、沈没時間はぴたりと一致する。

利根川丸の最後について、寺島は米軍艦隊と異なることを述べている。「松」が敵艦隊に突撃したおかげで逃げのびた四号海防艦と利根川丸であったが、一二号海防艦は行方不明となっていた。しばらくして「右後方、かすかに爆音が聞こえる」との報告があり、耳を澄ませると確かに昼間とは異なる重い爆音をした。「B-24（注：リベレーター、アメリカ陸軍・海軍ともに使用していた）だ！利根川丸よ、煙を出すな」と願ったが、利根川丸は速度を速め黒煙をあげた。そこで照明弾が投下され後方が明るくなった。浮かび上がった利根川丸にB-24は猛爆を加えた。せっかく生き残った利根川丸も真っ赤な炎を吹きながら没していった。B-24は本艦にも二回にわたり銃撃を加えてきたが、本艦の応戦に手強いと思ったのか、やがて飛び去っていったという。

「照明弾で照らされた後攻撃を受けて沈んだ」ということについては米海軍艦隊の記述と同一であるが、前島は爆撃、米国艦隊は巡洋艦の砲撃としている。利根川丸を護衛していた四号海防艦は近くにいたはずなので、当然米国艦隊のレーダーに映るはずである。そう考えれば、利根川丸はB-24の爆撃で沈み、オークランドが発射した照明弾で照らされ巡洋艦の砲撃で沈められたのは、四号海防艦とはぐれた輸送船だとも考えられる。ただし、四号海防艦艦長の水谷によると、利根川丸は照明弾による艦砲射撃と大型機の爆撃で沈められたとしている（佐藤、1983）。

小笠原教育委員会（1998）は「利根川丸に小笠原からの引揚者が乗船していて13名が行方不明になりました。この遭難で小笠原からの引揚者一人が生存、この人は父島で船頭をしていたおじいさんで、1週間の漂流で救助されました。」と述べている。この戦闘で、民間人も犠牲になったことがわかった。

前島によると、夜が明け、血に染まった四号海防艦は洗われ、機雷長以下4名の水葬が行われた。毛布にくるまれ、軍艦旗を胸に、高角砲の薬莖を両脇に抱えた英霊は、号砲の後、大海原に沈められたという。

また、行方不明になった一二号海防艦はB-24の攻撃を受けたり、舵が故障したりしながらも帰港した。

行方不明になっていた旧型の駆逐艦「旗風」は1945年1月15日に台湾の高雄にて米軍艦載機の攻撃を受け沈没したとされている（雑誌「丸」編集部、1970）ので生還したものと思われる。64隻の駆潜艇で8月4日に戦没したものはないので（伊達、1978）、同行した1ないし2隻の駆潜艇も生き延びたと考えられる。

このように第四八〇四船団のうち、輸送船5ないし6隻は全滅、護衛艦の「松」が沈没、

「旗風」、四号・一二号海防艦、1ないし2隻の駆潜艇は生還したことになる。制空権、制海権のない輸送作戦がいかに犠牲を伴うものかがよくわかった。この後も、輸送作戦は続き、しかも、護衛艦が十分でない状態であったため、輸送船や輸送艦の沈没は相次いだ。

Ⅸ. 聳島沖砲撃戦はレーダーを用いた夜間砲撃の実験か？

米海軍艦隊はレーダーを用いて砲撃をおこなっている。アメリカ軍のレーダーシステムについてみてみよう。

文献が戦艦の主砲射撃管制システム（堤、2007）しか見つからなかったのだが、軽巡洋艦でもほぼ同様なので、これを元に説明する。まず、方位板（Director）は艦橋の上などに置かれ測距儀とレーダーのアンテナからなっている。方位板に組み込まれている測距儀は、ジャイロ装置によって上下方向の動揺に対して自動的に安定を保つようになっている。アンテナからの情報は主砲発令所に届けられ、ここには射撃板（Range-keeper）と垂直安定儀（Stable Vertical）がある。射撃板はアンテナからの距離を割り出すアナログ計算機であり、手動で入力しなくても、距離及び相対運動のデータを計算してくれる。このデータが安定したときに射撃板の引き金を引くと発砲することができる。（注：日本軍のレーダーは相手の方向と距離を特定するだけで、射撃と連動していない）。また、自動射撃も可能である（精度はよくないが）。垂直安定儀は方位板の水平と垂直方向を自動的に維持する装置である。レーダーを制御するコンソールにはレーダースコープが設けられ、目標の距離と方向を目で確かめることができる。

以上のことをふまえながら、米軍艦隊の記録（United States Fleet Headquarters of Commander in Chief, 1944）から、どのようにレーダーを活用していたのか検証しよう。まず、各艦からの戦闘に対するコメントを引用する。

「ピロキシーの証言：駆逐艦と大型輸送艦への攻撃でレーダー制御の射撃を最初から最後まで行った。一斉射撃の弾丸は困難なく標示できた。

あまり命中弾が多くなかったのは、長距離で小さく曖昧な目標に対して全てレーダー制御で砲撃することが困難であることを示している。駆逐艦は近づいて攻撃すると魚雷で反撃することが考えられたので、長距離から攻撃した。2番目の目標は輸送艦で、大きくゆっくりだったので、すばやく破壊できた。駆逐艦などへの長距離の攻撃は弾薬を消費するが、相手の損害を可能にするには仕方がないことである。昼間の攻撃で小さな敵輸送船を味方駆逐艦が短距離から攻撃したが、すぐさま至近弾となり、まもなく命中し破壊した。輸送船に対して攻撃するにはこのような方法をとるべきである。

司令部が各艦に伝達した。「とても多く砲撃しているが、命中が少ない；標準をよく見ろ。」レーダー制御を用いて、至近弾が生じるような細かい模範を見逃さずに、多くの艦が可能な限り全ての努力を行ったが、命中の確率は低かった。細かな調整や近距離からの砲撃が細かい模範を示すだろう。」

「(25.16司令部の証言) たくさんの量の砲弾がいくつかの目標に消費されてしまったことから、この夜戦の成果には失望した。しかし、速度が速くなく、中距離の目標にはレーダー制御の射撃は有効であることが実証された。オークランドの照明弾は見通しのきかない状況では、他の艦の砲撃を助けることになった。」

6インチ砲弾は合計1791発（全て巡洋艦）、5インチ砲弾は巡洋艦1182発、駆逐艦が2434発である。駆逐艦の魚雷攻撃を恐れ、遠距離から攻撃したため、このような膨大な弾薬を消費したのだろう。47口径6インチ砲Mk16の最大射程距離は23,182 mで発射速度毎分7～10発（国本、2001）、38口径5インチ砲Mk30の最大射程距離は16,200 mで発射速度毎分15～22発（梅野、2007）である。米巡洋艦が6インチ砲で砲撃を開始したときの「松」との距離は14 kmだったので、5インチ砲の射程によりやく入った距離である。「松」の主砲40口径八九年式12.7糎高角砲の最大射程は14,000 m、発射速度は毎分14～16発であり（阿部、1999）、同じ内径のアメリカの5インチ砲に比べ、射程が短かった。

日本海軍は夜戦を得意としており、アメリカ軍のガダルカナル島上陸に対応した第一次ソロモン海戦（1942.8.8-9.アメリカ軍は「サボ島沖海戦」と呼ぶ）においては、日本軍の夜間の砲雷撃により連合軍海軍は敗北している（当時、アメリカ軍のレーダーの性能がよくなく、日本艦隊を発見するのが遅れた）。特に、見通しの効かない夜では、射程が30 kmもあり、航跡が目立たない日本の酸素魚雷（九三式魚雷）はアメリカ軍にとっては脅威であったのだろう。この教訓もあり、遠距離からのレーダー制御の射撃という作戦をとったのであろう。

報告書では次にレーダーの性能や運用についてのコメントがCombat Information Center（戦闘情報センター）の報告として各艦より報告が並んでいる。項目の先頭は（a）レーダーとなっており、もっとも重視していることがうかがえる。そこにはレーダー運用の問題点、改善すべき点が述べられている。

「（オークランドの報告）SC-2レーダー（注：対空レーダーのことだろう）は味方を追う時や、敵の飛行機に対して効果的だった。低く飛んでいる飛行機に対する早期警戒にはこの装置は有効ではなかった。」

「(モービルの報告) マーク8 (Mk8、注: 戦艦に搭載されたレーダーと同じもの、当時最新式のレーダーMk13は一部の戦艦などにしか搭載されていなかった) のレーダーの発見性能は期待したほどではなかった。しかし、マーク8レーダーは15000ヤードの範囲なら一斉射撃ではうまく捉えることができた。練習の時は18000ヤードでも十分に発見することができたので、荒れた海の場合ではこれしか成果が出ないのだろう。

レーダーアンテナについては、8月4日の戦闘で、船の回転揺れのため、マーク8レーダー射撃盤とマーク34 (Mk34) 方位板との間に混乱が生じた。500フィート海面から上にあるアンテナに波がかぶることが数回あり、その度にアンテナと安定儀 (Range-finder Stabilizer) を再び同調させなければならなかった。アンテナが垂直に保たれたところで、砲撃を開始したが、もたらされた結果から測距儀の水平安定板の設定を変更しなければならなかった。アンテナを上昇させる制御器が取り付けられれば、もっと目標監視員とレーダーの操作員がうまく操作できるだろう。」

「(ビロキシーの報告) 射撃制御レーダーについて、マーク8射撃制御レーダーはすべらしい結果を残した。水しぶきが鮮明に描写され、駆逐艦を示す点は14600から21000ヤードで表示することができた。大きな貨物船を35000ヤードの距離でもレーダーで感知できた。過去の戦闘と比較して、顕著な改善が見られており、レーダーなしには射撃はできない。」

上條 (2010) で「父島への航空機による攻撃は演習や実験だった」と論じたが、聳島沖砲撃戦もレーダー制御の夜間戦闘に関する演習や実験である要素が強い。報告書のタイトルが「BATTLE EXPERIENCE 戦闘体験」となっており、レーダー関係の他に「情報伝達」「砲の材料と装備の性能」「敵の戦略」「照明弾」などについて、各艦からの報告を元に、分析し、運用方法や改善点についてまとめている。これらの知見はフィリピン・硫黄島・沖縄での戦闘に利用されたのであろう。

X. おわりに

サイパンや硫黄島への輸送作戦と父島の関わりについて見てきたが、物量の不足していた日本軍が現実にそぐわず、兵士を危険にさらすような作戦を行っていたことが改めて明らかになった。日本軍の輸送作戦により、多くの兵士が一瞬にして命を失ったことや、我々が住む小笠原の付近でも悲惨な戦闘が行われたことも明らかになった。戦争で犠牲になった方々のご冥福をお祈りしたい。

駆潜艇五〇号の川副克己艇長の長男・川副克也さんにお話を伺うことができた。川副艇長は前述した戦闘で足に銃弾を受け、片足の切断手術を受けた。義足をつけながら、戦死した乗組員の遺族を訪問したり、サイパンへ遺骨収集や慰霊のため訪れたりした。彼は

1990年、80歳の時に、かつて乗り組んだ駆潜艇五〇号や特設駆潜艇第六京丸の記録を執筆したという。戦争の体験を風化させたくないとの思いがあったのだろう。私は彼の著作を2010年に国会図書館で発見し、この体験を小笠原の人々に伝えなければならないと考え、この論文の構想が広がっていった。2006年に彼は96歳で亡くなったとのことである。もう少し早く彼の著作を発見していれば彼から直接話を聞けたと思い、悔やまれてならない。

戦時中、国民学校高等科に在籍していた私の義父は動員され、向島日立造船（現在広島県尾道市）で働いていたという。硫黄島付近で沈没した二等輸送艦の多くは向島日立造船で造られたものであった。里帰りするたびに眺めていた造船所が硫黄島の戦闘に関わっていたとは思ってもよらなかった。

終戦後65年経ち、太平洋戦争を体験された方も高齢になっている。戦後生まれの我々が、体験談を聞いたり記録を調べたりすることで、戦争とは何であったかを考えることが必要であると切に思う。

謝辞

小笠原在住の方々には、貴重や情報やご意見をうかがった。軍事関係の情報収集については、小笠原水産センターの太田健一さんにご協力いただいた。小笠原に沈んでいる艦船の情報は笠井信利さん（マリンサービス・フィッシュアイ）、竹澤博隆さん（竹ネーチャーアカデミー）に教えていただいた。

五〇号駆潜艇の記録を提供していただいた長崎県在住の川副克彦さん（川副克己さんの次男）、お話を伺った兵庫県在住の川副克哉さんにも感謝申し上げます。

小笠原村教育委員会、防衛省防衛研究所、国会図書館憲政資料室、財団法人小笠原協会には貴重な文献を閲覧させていただき、情報を提供していただいた。感謝申し上げます。

文 献

- 阿部安雄（1999）主砲&機銃 丁型／改丁型。『図解日本の駆逐艦』、光人社、70-73。
浅沼文雄（1995）太平洋戦争と強制疎開のあとさき。『小笠原諸島強制疎開から50年記録誌』、東京都小笠原村、25-40。
橋本衛（2001）硫黄島防空砲台奮戦始末。『硫黄島決戦』光人社NF文庫、125-271。
防衛庁防衛研修所戦史室（1966）『戦史叢書・中部太平洋陸軍作戦2』朝雲新聞社、624p。
防衛庁防衛研修所戦史室（1968）『戦史叢書・マリアナ沖海戦』朝雲新聞社、638p。
伊達久（1978）戦歴/要目。『写真集日本の小艦艇（続）』光人社、170-181。
東倉勉一（1990）『孤島の戦場 悲しき兵隊よもやま話』光人社、238p。

- 堀江芳孝 (1965) 『闘魂 硫黄島』 恒文社, 308p.
- 「海軍」編集委員 (1981) 小艦艇. 『海軍第11巻 小艦艇 特務艦艇 雑役艦船』 誠文図書, 33-78.
- 上條明弘 (2010) 父島洲崎の変遷について (その2). 首都大学東京小笠原研究年報 33: 51-85.
- 川副克己 (1990) 『知られざる第50号駆潜艇の航跡』 中央人事通信社, 382p.
- 川相昌一 (2006) 『硫黄島戦記』 光人社, 223p.
- 木俣滋郎 (1986) 『日本水雷戦史』 図書出版社, 694p.
- 木俣滋郎 (1989) 『日本軽巡戦史』 図書出版社, 685p.
- 木俣滋郎 (1994) 『日本海防艦戦史』 図書出版社, 299p.
- 木俣滋郎 (1999) 駆逐艦対潜水艦. 『駆逐艦入門』 光人社NF文庫, 279-301.
- 木俣滋郎 (2008) 駆潜艇・海防艦. 『小艦艇入門』 光人社NF文庫, 127-187.
- 国本康文 (2001) アメリカ巡洋艦の主砲. 『第2次大戦のアメリカ巡洋艦』 世界の艦船 No.578, 162-167.
- 中村信 (1969) 父島野戦貨物廠. 『小笠原兵団の最後』 原書房, 141-149.
- 日本海軍第十一水雷戦隊司令部 (1944) 『第十一水雷戦隊戦闘日誌』 日本海軍, (防衛研究所所蔵)
- 日本海軍父島方面特別根拠地隊司令部 (1944) 『父島方面特別根拠地隊戦闘詳報 第四號』 日本海軍, 638p. (防衛研究所所蔵)
- 落合康夫 (1974) 二等輸送艦硫黄島に玉砕す. 『写真集日本の小艦艇』 光人社, 159p.
- 小笠原教育委員会 (1998) 利根川丸最後の航海. 機関誌「小笠原」127号. 財団法人小笠原協会, 4p.
- 佐藤和正 (1983) 実戦即訓練 (海防艦第四号艦長・水谷勝二少佐の証言). 『館長たちの太平洋戦争』 光人社, 502-512.
- 寺島健次 (1977) 血みどろ「4海防」地獄の硫黄島航路制海記. 丸、371: 66-79.
- 堤明夫 (2007) アメリカ戦艦の主砲射撃管制システム. 『アメリカの戦艦』 学習研究社, 181-189.
- 梅野和夫 (2007) 『世界の艦載兵器一砲煩兵器篇』 光人社, 275p.
- United States Fleet Headquarters of Commander in Chief (1944) 『BATTLE EXPERIENCE Night action and subsequent bombardment of Chichi jima and Ani jima, Bonin Islands 4-5 august 1944』 Navy Department, 18p.
- 雑誌「丸」編集部 (1970) 駆逐艦. 『日本軍艦写真総集』 光人社, 203-213.